

バレーボールにおけるルール改正に伴う戦術の変化 についての研究(2)

著者	吉田 康伸, 濱口 純一, 増山 光洋, 山田 快
出版者	法政大学体育・スポーツ研究センター
雑誌名	法政大学体育・スポーツ研究センター紀要 = The Research of Physical Education and Sports, Hosei University
巻	29
ページ	11-14
発行年	2011-03-31
URL	http://doi.org/10.15002/00007163

バレーボールにおけるルール改正に伴う戦術の変化についての研究②

The research for change of tactics follow revision rule on volleyball②

吉 田 康 伸 (法政大学)
Yasunobu Yoshida
濱 口 純 一 (法政大学)
Junichi Hamaguchi
増 山 光 洋 (中央学院大学)
Mitsuhiro Masuyama
山 田 快 (順天堂大学大学院)
Kai Yamada

Key word (キーワード)

Volleyball (バレーボール)、Revision rule (ルール改正)、
Tactics (戦術)、Strategy (戦略)

1. はじめに

全てのスポーツには「ルール」という共通の約束ごとがあり、それを順守しながらプレーをすることによって、ゲームにおける秩序が保たれている。

近年のバレーボールにおいてはルール改正が頻繁に行われるようになり、ゲームの様相もこの10年程で随分と様変わりしてきている。

1992年までは4年に1度のオリンピックの年に開催されるFIVB(国際バレーボール連盟)総会ごとにルール改正は行われてきたが、その後は2年に1度になり、1998年以降は必要に応じて随時新ルールが適用されるようになった。

バレーボールの特性はネットによって分けられたコート上で、2つのチームがボールをコントロールしながら、相手コートにボールを落とすことを目標に得点を競う競技であるが、過去においては攻撃戦術が優位になることを防ぐ目的でネットの両サイドにアンテナを設置して攻撃の幅を限定するなど、主にプレーにおける攻守のバランスを保つ目的でルール改正は行われてきた。

しかし近年におけるラリーポイント制の導入やカラーボールの使用などは、マスメディアや観客を意識したボールの回転のわかりやすさ、時間短縮を目的としたもので、実際にプレーする現場レベルでは迅速な対応に追われるようになってきている。

そこで本研究では、2000年までを検証した前回の研究以降のルール改正を主に取り上げると共に、それ以降の戦術の変化について考察していくことにした。

2. 主なルール改正と戦術の変遷(2000年以前)

ここでは2000年までに改正された主なルールと戦術の変遷についてまず確認をしていくことにする。

ただし戦術面に関しては前回の研究同様、身体的能力の違いから常時男子が先行していたこともあるため、男子の戦術を中心に追っていくこととする。

①「ブロックの際のオーバーネットは反則でなくなり、またブロックに参加したどのプレーヤーも、ブロック後のボールに続いて再び触れることが出来る。」(1964年決定)。

このルール改正によってブロックキングがより攻撃的な要素を持ち、長身者に有利になったため、戦術面においては最強のブロッカーをセンターにおく「センターブロックシステム」が開発され、あらゆる方面からの攻撃に対して対応が出来るようになった。

このようにオフェンス技術の高まりに対してディフェンス面とのバランスを取るためと、オーバーネットの判定が審判によって違いがみられたことから判定基準を統一化する目的で改正が行われた。

②「チームは相手方にボールを返す前、ブロックの際の接触を除いて3回プレーすることが許される。」(1976年決定)。

このルール改正も攻防のバランスを保つ目的で採用されたが、戦術面では改正前まではサーブプレッシュからでしかみられなかったコンビネーション攻撃が、それ以外のお互いのラリー中でもみられるようになったことが挙げられる。

③「両サイド・マーカの外側に接して2本の柔軟なアンテナを、両者の距離が9mとなるようにネットに取り付ける。」(1976年決定)。

攻撃の幅を制限する目的で採用されたが、戦術面においてはさほど変化はみられなかった。

④「チームにおける第1球目でのダブルコンタクトの廃止。」(1994年決定)。

いわゆる第1球目のドリブルが廃止されたことにより、打球の弱いサーブはオーバーハンドパスで処理されるようになり、さほどサーブレシーブが乱れなくなったため、この時期あたりから各チームとも強烈なジャンプサーブを複数人打たせるチームが出現し始めている。

採用の目的はラリーが続くようにするものと、判定の統一化によるものである。

⑤「それぞれのチームは、12人の競技者リストの中から専門的な守備のためのリベロ・プレーヤーを1人登録することができる。」(1998年決定)。

ディフェンス力の向上を目的とし、低身長者に対しても出場の機会を広く与えられるようになったもので、戦術面としてはこのルール改正によって、よりポジションごとの専門性や分業化が促進されたものになった。

それに伴い、今までは大型選手で攻撃力はあるが、レシーブが苦手なためにスターティングメンバーとしては試合に出場できなかったプレーヤーが、リベロプレーヤーと常時交代することで各チームの大型化がより進み、ますます大型チーム有利な状況を作り出してしまったともいえる。

⑥「全セット25点のラリーポイントシステムで行う。ただし第5セットのみ15点で行う。」(1998年決定)。

時間短縮を目的として採用され、試合時間の統一化が図られたもので、バレーボールのゲームの様相を大きく変えるルール改正となった。

サイドアウト制では3時間以上という長い試合もあったが、ラリーポイント制では長い試合でも2時間程度で終わるようになり、得点方法もよりわかりやすくなったことが挙げられる。

このルール改正による戦術面の変化については、採用されてから約10年を経た2001年以降の現在に至るまでの流れの中で、後程述べることにする。

⑦「サービスされたボールがネットに触れ、相手側に入った場合、そのプレーは続行される。」(2000年決定)。

いわゆるサーブのネットインが許容されたもので、ラリーポイント制採用に伴い、少しでもサーブの入り確立を高めようとしたものである。さほど高い確率では出現しないが、リスクの高いジャンプサーブを打つ条件が良くなり、より速度の速いジャンプサーブが打たれるようになった。

3. 2001年以降のルール改正と現在に至るまでの戦術の変化についての考察

ここでは2000年までの主なルール改正と戦術の変化を踏まえた上で、現在(2010年)に至るまでのルール改正を挙げ、その目的について述べると同時にラリーポイントシステムを含めた新ルールによる戦術の変化についても考察していくことにする。

①「ネット上での押し合いプレー後の継続をする。」(2006年決定)。

ラリーを続けるためと判定の統一化を目的としたもので、以前はノーカウントの判定が下されていた。

戦術面にはさほど変化はみられなかったが、押し合い後のボールの処理をするプレーが重要なものになった。

②「センターラインを越える相手コートへの侵入に関して、両足より上部の身体のいかなる部分が、相手コートに触れても、相手プレーを妨害しない限り許される。」(2009年決定)。

①と同じくラリーを続ける目的で改正されたが、現状では特にプレー面においての変化はみられないが、今後の予想としては故意ではなくとも反則ではないということから、ダイナミックなプレーをして身体の大部分が相手コートに入った場合に、相手プレーヤーと接触して怪我などの事故が起こるのではないかという、選手の安全面が若干危惧されている。

③「競技者がネットに触れても、相手方のプレーを妨害しない限り反則とはならない。ただしボールをプレーする動作中に、ネット上部の白帯やアンテナの先端80cmまでの部分に触れたときは反則となる。」(2009年決定)。

このルール改正もラリーを続けるためと判定の統一化が目的で行われたが、紛らわしいタッチネットの判定がなくなったことで、プレーヤーもよりボールに集中できるようになった一方、ネットが激しく揺れるようなものでも反則とはならなくなったため、②同様、ネット際でのプレーヤー同士の接触など安全面に課題が残るものといえる。

以上が2001年以降の主なルール改正であるが、いずれも反則の規制緩和をすることによってラリーを続行させ、判定の統一化を図る目的で改正されたもので、戦術面に関しては

大きな変化をもたらすものではなかったといえる。

ただし1999年から採用されたラリーポイントシステムに関しては、バレーボールの様相に影響をもたらしたのとなり、戦術面やパソコンを用いてのデータバレーによる技術分析といったチーム戦略の面で大きな変化がみられた。

まず戦術面に関してはサイドアウト制と比較して、常時点数が加算されるため展開が早く、1点に対する重要度が増したことによりゲームの序盤から得意な攻撃パターンと、いわゆるオポジットという強打者の打数が増えたことが挙げられる。

またミスも相手チームの点数になることから採用当初はサーブの威力が弱まると予想されていたが、緩いサーブでレシーブをセッターが移動しない状態で返球されて、後衛の選手も攻撃に参加するバックアタックも含めたコンビネーション攻撃を仕掛けられると、ほぼ防ぎきれない状態になるため、相手攻撃を単調にする目的やネットインサーブが許容されたことも含め、ジャンプサーブによるより攻撃的なサーブの出現が多くなった。

そういった状況の中で、1984年にアメリカ男子チームがバックアタックをコンビネーション攻撃に組み込んで以降、ポジションごとの分業化も進み、攻撃戦術は常時4人攻撃（セッターが前衛時は2ヶ所からのバックアタック）が仕掛けられるようになったが、ラリーポイント制導入以降からブラジル男子チームが、常時4人のアタッカーによるファーストテンポの攻撃を確立させ、現在に至っている。

テンポとはセッターのトスアップからアタッカーがスパイクをヒットするまでの時間のことで、ファーストテンポの攻撃とは各クイック攻撃を含む、約0.7秒以内の攻撃のことを指し、現在のトップレベルにおいては、クイックのほかに両サイドの平行トスやセンターからのバックアタック（パイプ攻撃）などもこれに含まれる程、攻撃の高速化が進んでいる。

上記のような攻撃戦術を常時実現するために、ブラジル男子チームはまず強烈なジャンプサーブに対して、サーブレシーブの返球目標地点をセッターの定位置からアタックライン付近まで広げ、サーブレシーブの役割を担うプレイヤーの技術的負担を減らすことで、サーブレシーブ直後からのファーストテンポ攻撃への参加が可能になり、常時4人によるファーストテンポ攻撃を実現させた。

またサーブレシーブからの攻撃以外のラリー中の場面でも、1本目のボールの返球がアタックライン付近であればいわゆる二段トスといわれるサードテンポの攻撃ではなく、ファーストテンポの攻撃を実現させた。

この戦術導入によりラリーポイント制が定着した主要大会では2000年のシドニーオリンピックと2008年の北京オリンピックでの2位を除けば全ての大会でブラジルチームが優勝を果たしているが、これは1人の強打者に頼らずに、チームとしてコンディションの良いプレイヤーを起用しながら勝ち続けていくことが可能なことを証明したのもであった。

さらにルール改正と共に技術や戦術が洗練されていく中で、チーム戦略という面からデータバレーというソフトを用いての技術分析に進化がみられ、試合の現場で生かされるようになった。

これは相手チームの攻撃パターンの傾向や各攻撃プレイヤーの得意なコース、セッターのトス回しの傾向、守備位置の特徴などのデータ分析がより細かく高度化され、事前情報にプラスして、試合におけるリアルタイムでの情報もアナリストからベンチスタッフに送られ、選手に具体的な指示を出すことが可能になった。

同時に自チームのデータも分析できることから、そのデータをもとに選手の交代や攻撃パターンの変更などに対して役立てるようにもなった。

4. 結論

以上のように過去のルール改正と戦術の変化について検証を行ってきたが、かつては技術面において攻撃と守備のバランスを保つという目的でルール改正が行われてきたのに対し、近年においてはタッチネットの廃止による判定の統一化やラリーポイントシステム導入での時間短縮など、メディアや観客に対して、わかり易さを意識してのルール改正が必要に応じて随時行われるようになった。

このような流れの中で、現場レベルでは迅速な対応が求められるようになってきているが、例えば2008年は北京オリンピック大会から、突然それまでの18枚張りの構造から8枚張りの全く新しいタイプのボールが、環境保護の目的もあり、人工皮に変更するというで使用されたが、これはその年の途中で、しかも直前のワールドリーグまでは旧タイプのボールが使用されていたことから現場では対応に苦慮したものであった。

戦術・戦略面においても既に高速コンビネーション攻撃やジャンプサーブの導入などが定着化され、データバレーによる分析といった情報戦も含めて、より質の高い洗練されたものになりつつあるが、今後も特に新しい技術や戦術が開発されない限り、最終的には高さやパワーを兼ね備えたチームに有利な状況は続くと思われ。

いずれにしても近年の反則規制を緩めたルール改正によって、ミスを恐れないダイナミックなプレーが数多く出現することが予想され、随時執行されるルール改正に対しても、素早く対応していく柔軟さも必要とされていくであろう。

参考文献

- (1) A・セリンジャー：「パワーバレーボール」ベースボールマガジン社
- (2) 池田久造：「バレーボール ルールの変遷とその背景」日本文化出版 1985年
- (3) 小鹿野友平ほか：「バレーボールの学習指導」不味堂

出版 1987年

- (4) カーチ・キライ：「カーチ・キライのパーフェクト・クリニック」日本文化出版 1987年
- (5) 清川勝行：「バレーボールにおける攻撃技術・戦術の歴史的発展と推移」日本バレーボール協会科学研究委員会研究報告集第IV巻 1988年
- (6) 砂田孝士ほか：「6人制バレーボールのルールと審判法」大修館書店 2000年度版
- (7) 日本バレーボール学会：「バレーペディア・バレーボール百科事典」日本文化出版 2010年
- (8) 吉田康伸ほか：「バレーボールにおけるフロントとバックの攻撃パターンについての研究②」法政大学体育研究センター紀要第17号 1999年
- (9) 吉田康伸：「バレーボールにおけるルール改正に伴う戦術の変化についての研究」法政大学体育・スポーツ研究センター紀要第21号 2003年
- (10) 吉田康伸ほか：「バレーボールにおけるラリーポイント制とサイドアウト制の違いについての研究」法政大学体育・スポーツ研究センター紀要第25号 2007年
- (11) 吉田康伸ほか：「バレーボールにおけるジャンプサーブの効果についての研究」法政大学体育・スポーツ研究センター紀要第26号 2008年